

2023年8月28日(月)

老球の細道747号

常識を疑え

会津バスケットボール協会 室井 富仁

明治40年野球の意外な試合がわが国で開かれた。意外な試合とは、観客からお金を取って開かれる有料の試合のことである。日本にプロ野球が誕生したのは昭和になってからなので、この有料試合はプロ野球によるものではない。試合をしたのは慶応の学生だった。

前の年、応援の激しさと早慶戦が中止になり、対戦相手に苦勞していた慶応野球部は、ハワイのセントルイス野球団というチームを招いて試合を行うことになった。日本初の海外チーム招待試合である。しかし、海外からセミプロチームを招くには、それなりの経費がかかる。そこで考え出されたのが、試合を一般の人に公開して入場料を取るやり方だった。入場料で招待費用を捻出したのである。さすが慶応ボーイである。

試みは成功し、慶応は、遠来のチームに相応のギャラを支払い、不快な思いをさせることはなかったという。

この話を『目録20世紀 1907年(明治40年)』(講談社)で読んでいる時に、阪神甲子園球場で行われていた「第105回全国高校野球選手権記念大会」において、慶応高校が2連覇を狙う仙台育英高校(創始者は会津出身)を8-2で破り、107年ぶりに2度目の優勝を果たした。慶応大学の強さには認識があったが、慶応高校の強さは予想外だった。100年以上前の常識を覆す行動力、発想力の伝統が脈々と続いていた結果なのだろうか。

「エンジョイ・ベースボール」を旗印に、「優勝して高校野球の常識を変える」と選手達は本気になって思い、周囲から笑われることがあったが、本当にやり遂げた。

朝日新聞の「ひと」欄に慶応高校森林貴彦監督の話が掲載されていた。チームのスローガンは「常識を疑おう、そして、考えよう」。その中で、筑波大学大学院でコーチング論を学んだ時の話があった。

【研究室で陸上競技や元力士達と準備運動の話題で「野球では全員で足をそろえてランニングする」と言うと「意味あるの?一人ひとりのためになっている?」と言われ、当たり前が、揺さぶられた。長年受け継がれた指導法に「理屈を知らないままに練習を繰り返すのは、良いことなのか」と疑った】

どこの学校の野球部(他の種目も似たり寄ったりであるが)も、グラウンドに全員が集合すると、きちんと整列してからランニングが始まる。皆で意味不明の声を発しながら。その後円陣を組んで準備体操、あるいはストレッチと続く。私はこのW-up方式を止めた。練習時間の短縮と効率化のために、この旧式W-upを個人で行わせることにした。個人でできることは個人練習で、皆が集まらなければできない練習をチームで行う。

「静的ストレッチは筋肉の緊張を緩めてパフォーマンスを低下させる」「ケガした時のアイシングはケガからの回復を遅くする」など、今までの色々な常識が変わりつつある。常に常識を疑い、自分で考える習慣を選手も指導者も持たなければならない。